

## 詩篇56-60篇 「勇敢に戦う信仰」

### 1A 何もできない人間 56

1B 一日中痛めつける敵 1-7

2B 味方なる神 8-13

### 2A 御翼の陰に隠れる者 57

1B 過ぎ去る滅び 1-6

2B 揺るがない心 7-11

### 3A 悪者の滅び 58

1B 偽りの暴虐 1-5

2B 神の復讐 6-11

### 4A 国々を罰する神 59

1B 待ち伏せする敵をあざ笑う方 1-9

2B 激しい憤りによる滅ぼし 10-13

3B 恵みの神 14-17

### 5A 神に拠る働き 60

1B 動揺にいる民 1-5

2B 土地を配分される神 6-8

3B 虚しい人の助け 9-12

## 本文

詩篇 56 篇から見ていきます。私たちは再び、ダビデが戦いの中にいる詩篇を読んでいます。サウルに追われている時のダビデと、さらにダビデがイスラエルとユダの統一国の王となった後、その後の周辺国との戦いの姿を見ます。私たちは合同修養会、また私自身は奥多摩での修養会、そして先週のテモテ第一の手紙からの説教で、私たちが信仰の戦いをしていると感じ取られたと思います。私たちが神によって、神の国の中に入れさせられており、その中でサタンに攻め入っている姿を見ました。そして、それぞれが戦っておられると思います。

愛するみなさんからお聞きする話は、それぞれが戦いの中におられることを知ります。戦いは必ずしも否定的な意味で話していません。新たな人に伝道ができたであるとか、そういった宣教の道が開かれたのも戦いの一貫です。あるいは、いままで突っかかっていた自分の中にある捨てられないものが、神の恵みによって捨てることができたであるとか、内なる戦いもあるでしょう。私もそうです、社会の現場で働いておられる皆さんとは異なる次元にいますが、例えば福音とは異質の教えであるとか、神が見ておられる教会とは何であるかを見ていくことであるとか、そういったところに戦いがあります。それは、神の国が拡がっている中において、攻められながらなおのこと攻めていく中で起こっていることです。

ダビデはまさに、神によって選ばれ、その個人の主との関係から、人々が彼のところに集まって

戦いの一団となり、そして民がダビデについていき、ついに王となり、それから周囲の国々を平定して、神を王とするイスラエルを打ち立てるのです。ですから、私たちは大いにダビデの生涯とその賛歌から学び取ることができます。

### **1A 何もできない人間 56**

56 指揮者のために。「遠くの人、もの言わぬ鳩」の調べに合わせて。ダビデのミクタム。ペリシテ人が、ガテでダビデを捕えたときに

午前礼拝で学びましたように、これはダビデがサウルから逃げるために、たった独りで逃げている時のことであります。題名が、「遠くの人、もの言わぬ鳩」とありますが、これはダビデ自身のことを言っているのかもしれませんが。彼がエルサレムから遠く引き離されて、そして何も口に出すことができない状況で、その呻いている姿を「物言わぬ鳩」と言っているのかもしれませんが。

### **1B 一日中痛めつける敵 1-7**

56:1 神よ。私をあわれんでください。人が私を踏みつけ、一日中、戦って、私をしいたげます。  
56:2 私の敵は、一日中、私を踏みつけています。誇らしげに私に戦いをいどんでいる者が、多くいます。56:3 恐れのある日に、私は、あなたに信頼します。56:4 神にあつて、私はみことばを、ほめたたえます。私は神に信頼し、何も恐れません。肉なる者が、私に何をなしえましょう。

ダビデは今、ガテのペリシテ人から嫌がらせを受けています。「するとアキシユの家来たちがアキシユに言った。「この人は、あの国の王ダビデではありませんか。みなが踊りながら、『サウルは千を打ち、ダビデは万を打った。』と言って歌っていたのは、この人のことではありませんか。」(1サムエル 21:11)」サムエル記第一にはこれしか乗っていませんが、一日中いろいろなことを言ったのでしょう。

けれども、ダビデは主に信頼しますと言っています。それは、神のみことばがあったからです。イエス様は、「しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。(ヨハネ 14:26)」と言われました。聖霊が神のことばを私たちに与えられる時に、ダビデと同じように恐れても仕方がないところを、なおのこと恐れぬ力が与えられます。

56:5 一日中、彼らは私のことばを痛めつけています。彼らの思い計ることはみな、私にわざわいを加えることです。56:6 彼らは襲い、彼らは待ち伏せ、私のあとをつけています。私のいのちをねらっているように。56:7 神よ。彼らの不法のゆえに、彼らを投げつけてください。御怒りをもって、国々の民を打ち倒してください。

ペリシテ人の行なっていることは、ダビデの言葉に対する嘲笑でした。もしかしたら、ゴリヤテに対してダビデが対峙した時に、彼の発した言葉をからかっているのかもしれませんが。「1サムエ

17:45 ダビデはペリシテ人に言った。「おまえは、剣と、槍と、投げ槍を持って、私に向かって来るが、私は、おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の主の御名によって、おまえに立ち向かうのだ。」とダビデは言いました。このことをからかっているのです。それはダビデの言葉というよりも、神の御名を掲げている言葉を痛めつけているのです。ゆえに、ダビデはそれを不法と断じており、打ち倒してくださいと神に祈っています。

## 2B 味方なる神 8-13

56:8 あなたは、私のさすらいをしるしておられます。どうか私の涙を、あなたの皮袋にたくわえてください。それはあなたの書には、ないのでしょか。

彼は「さすらい」と言っていますが、文字通り流離っていました。エルサレムから離れ、たった独り敵の領域に入らなければならなかったその涙を今、主の前で流しています。しかし、神はその涙一粒も、すべて覚えておられます。すばらしいですね、悲しむ者は幸いです、その人は慰められるとイエス様は約束されました。新しいエルサレムでは、都の中央から流れる生ける水の川があり、そこには木から実を取って食べることができ、その葉は彼らを癒したとあります。私たちに与えられた苦しみと悲しみ、それらが一つ一つ、神が永遠に拭い去ってくださるのです。

56:9 それで、私が呼ばわる日に、私の敵は退きます。神が私の味方であることを私は知っています。56:10 神にあつて、私はみことばをほめたたえます。主にあつて、私はみことばをほめたたえます。56:11 私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人が、私に何をなしえましょう。

午前礼拝で学びました、私たちが信仰の戦いに臨む時に絶対に知っていかなければいけない前提は、「神が私の味方」だということです。「そんな、私は神が味方して下さるほど良いことを行っていない。」と私たちは思ってしまう。しかし、神は恵みによって、信仰によって私たちを救ってくださいました。もし、私たちの行ないによって救ってくださったのであれば、神は当の昔に私たちを滅ぼしておられます。神はただ憐れまれて私たちを選び、それでキリストにあつて義と認めてくださったのです。神は味方なのです。

そしてダビデは、4節の言葉を繰り返しています。これは賛歌ですから、4節と10-11節が繰り返しの部分です。肉に過ぎない者が、人間が自分に何をなすことができるのか？ということです。イエス様は、ご自分の弟子たちに同じ励ましを与えられました。イエス様はパリサイ人や律法学者と激しい議論になり、弟子たちに対しては人を恐れてはいけなさいと言われました。なぜなら、イエス様が彼らによって殺されるように、弟子たちも彼らによって迫害を受けるからです。そこで、こう言われたのです。「ルカ12:4 そこで、わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、あとはそれ以上何もできない人間たちを恐れてはいけません。」そして主は、頭の髪の毛さえも、みな数えておられるのだと言われました。さらに、ユダヤ教の会堂や役人、総督のところまで連れて行かれたら、何を言おうかと心配するな、「そのときに聖霊が教えてくださるからです。(12節)」と言われました。まさに、ダビデと同じように、私たちは聖霊によって神の言葉が与えられ、人を恐れ

ず、主をほめたたえることができます。

56:12 神よ。あなたへの誓いは、私の上にあります。私は、感謝のいけにえを、あなたにささげます。56:13 あなたは、私のいのちを死から、まことに私の足を、つまずきから、救い出してくださいました。それは、私が、いのちの光のうちに、神の御前を歩むためでした。

ダビデの心の中では、すでに敵どもから救われていました。そして、感謝のいけにえをささげるために誓いを立てています。大事ですね、パウロはテサロニケ人に、「いつも感謝しなさい。」と勧めました。感謝することに徹するのです。誓いを立てるということは、感謝したいと思う時にして、そうでない時は感謝をやめるというものではなくて、ちょうど結婚の誓約のように、どんなことがあっても、私は感謝するのだ。主に対して感謝することに私は身を捧げて、そこから決して離れないのだという決意であります。感謝は感情ではなく、主に対する信仰なのです。

## **2A 御翼の陰に隠れる者 57**

57 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクタム。ダビデがサウルからのがれて洞窟にいたときに

57 篇から 59 篇まで、「滅ぼすな」という調べで作られています。もちろんその曲がどのようなものであったかは知る由もありませんが、滅ぼすなという言葉は自分を滅ぼすな、という強い思いの表れであるに違いありません。

時は、ダビデがエン・ゲディで洞窟に隠れている時です。ダビデがガテから救われて、彼のところには自分の家族と親族、そしてイスラエルの中で不満な者、困った者、そのような者たちが集まって、後にダビデの勇士となる一団となります。そして死海を渡って、モアブの王に両親を託します。けれども預言者によって、外国に逃げるのではなくユダに戻るようと言われて戻ってくるのですが、ケイラの町、そしてジフの荒野に行きます。どちらでも、同じユダの者たちなのにサウルの側に付きます。けれども、ダビデは一命をとりとめます。そして、死海の北東部分にあるエン・ゲディという、オアシスのところに隠れます。そこには数多くの洞穴があります。今でも、川が流れ込んでそこだけは緑があり、その川は死海に流れ込んでいます。そこにサウルが精鋭部隊を三千人連れて行き、ダビデをくまなく探すのです。

### **1B 過ぎ去る滅び 1-6**

57:1 神よ。私をあわれんでください。私をあわれんでください。私のたましいはあなたに身を避けていますから。まことに、滅びが過ぎ去るまで、私は御翼の陰に身を避けます。57:2 私はいと高き方、神に呼ばわれます。私のために、すべてを成し遂げてくださる神に。57:3 神は、天からの送りで、私を救われます。神は私を踏みつける者どもを、責めておられます。セラ 神は恵みとまことを送られるのです。

56 篇の一節もこども、「神よ。私をあわれんでください。」という言葉から始めています。神が憐れむというのは、本来ならば滅ぼされてしかるべきなのに、それを控えるということです。この地上に生きているということは、まさに罪が入ってきているところに生きており、今でも生きているのは神がもっぱら憐れんでくださっているからです。主が憐れみを注いでいるから、この一日も自分は滅ぼされずに生きています。

そして、ダビデは正しく臆病になっています。「御翼の陰に身を避けます。」と言っています。子の鳥が母鳥の翼に隠れている姿です。自分が、これは耐えきれないと思うような圧迫を受ける時に、このように主のところにきていいのです。甘えていいのです。自分を防御してよいのです。「私は、こんなに弱い存在だ、情けない。」と自分を責めなくてよいのです。「教会は、弱虫の来るところだ。」と人々が言っても、良いのです大胆に弱虫になればよいのです。

そして、ダビデは「滅びは過ぎ去る」と言っています。大事ですね、敵による破壊はいつまでも続くことはありません、過ぎ去るのです。試練の中にいると私たちはそれがずっと続くと思いますが、いつか過ぎ去ります。

そして、ダビデは「いと高き方」に呼び求め、「天からの送りで」救ってくださると祈っています。今、この地上で起こっていることに目を留めるのではなく、天に目を向けたのです。地上のものは過ぎ去ります、けれども天は過ぎ去りません。ただ、いと高き方、天といっても、私たちはそこに祈りが届かないと思っては行けません。神はキリストにあって、天を身近なものとしてくださいました。「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。(エペソ 2:6)」私たちが主に祈る時に、そのまま天につながっており、ゆえに地上で起こっていることを乗り越えることができます。

57:4 私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になっています。彼らの歯は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です。57:5 神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられますように。

獅子のように自分を喰い尽くそうとしています。使徒ペテロは、迫害を受けているキリスト者たちにこう言いました。「1ペテロ 5:8 身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。」いつ何時、私たちにも悪魔が魂を食いちぎるようなことをするか知れませんが、けれども、悪魔に立ち向かいなさいとペテロは励まします。たとえ肉体を食いちぎっても、魂はどうすることもできないからです。

57:6 彼らは私の足をねらって網を仕掛けました。私のたましいは、うなだれています。彼らは私の前に穴を掘りました。そして自分で、その中に落ちました。セラ

ダビデは先ほどから、主に自分のことを明け渡していました。2 節に戻ってください、「私のため

に、すべてを成し遂げてくださる神に」と言っていますね。そして、天におられる神を見上げて、ほめたたえています。自分は主に目を向けて、今起こっていることも、主が最後まで成し遂げてくださるのです。ダビデは、サウルに追われている時も、少しずつ彼を王とするイスラエルの国が造られるために、神が水面下で動いておられることを感じていました。主が行ってくださることを信じて、サウルと戦いことを一切せず、天の神に任せたのです。使徒パウロも、ピリピの兄弟たちにこう言いました。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。(ピリピ 1:6)」

そしてダビデは、ここで敵が自ら掘った穴に落ち、自ら仕掛けた網に引っ掛かっているのを見えています。「さばいてはいけません、さばかれないためです。」とイエス様は戒められましたが、人を滅ぼそうとするものは、同じように滅ぼされていくのだということです。神が同じ量りで報いられます。だから、自分のほうでは何もしなくてよいのです。

## 2B 揺るがない心 7-11

57:7 神よ。私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません。私は歌い、ほめ歌を歌いましょう。  
57:8 私のたましいよ。目をさませ。十弦の琴よ。立琴よ、目をさませ。私は暁を呼びさましたい。  
57:9 主よ。私は国々の民の中にあつて、あなたに感謝し、国民の中にあつて、あなたにほめ歌を歌いましょう。57:10 あなたの恵みは大きく、天にまで及び、あなたのまことは雲にまで及ぶからです。57:11 神よ。あなたが、天であがめられ、あなたの栄光が、全世界であがめられますように。

敵が穴に落ちたので、ダビデは勝利のほめ歌をうたっています。「ゆるぎません」と繰り返しています。これは堅い心です、地震のような試練や困難が起こってもしっかり立っている心を表しています。パウロが新しく信じたテサロニケ人に、「あなたがたが主にあつて堅く立っていてくれるなら、私たちは今、生きがいがあります。(1テサロニケ 3:8)」と言いました。

そして、神の恵みとまことについて、それがいかに高い所にあるかをほめたたえています。神の恵みとは、神が私たちが良く思われていることです。午前礼拝で学びました、神の本質は善なのです。そして、神はまことに満ちておられます、神の真理の御言葉があります。そして 11 節の言葉は、5 節にもあり繰り返されています。

ダビデは、国民の中でほめ歌をうたうと繰り返しています。これは、ダビデの賛歌の特徴です。彼はイスラエルの民の間だけでなく、まだ神を知らぬ異邦人の間でも神の名をほめたたえたいと強い願いがありました。これは、宣教の願いです。ダビデの心に、神の御子が、まだイエスの名を聞いたことのない人々にその御名を知らせる願いがあるのです。

## 3A 悪者の滅び 58

こうして 56 篇と 57 篇において、敵からの救いを歌いました。58 篇では、この敵がことごとく滅びるよう主に願い出しています。

## 1B 偽りの暴虐 1-5

58 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクタム 58:1 力ある者よ。ほんとうに、おまえたちは義を語り、人の子らを公正にさばくのか。58:2 いや、心では不正を働き、地上では、おまえたちの手の暴虐を、はびこらせている。

「力ある者」とは、権力を持った者たちのことです。裁きの座についている者たちのことです。彼らは、神に任せられたその権威を使って、公義を行わなければいけないのに、その裏腹の不正を行っているのです。サウルたちが本来なら正義を行わなければいけないのに、自分たちのことばかりを考えて動いていた、その不正をダビデは見っていました。

58:3 悪者どもは、母の胎を出たときから、踏み迷い、偽りを言う者どもは生まれたときからさまよっている。58:4 彼らは、蛇の毒のような毒を持ち、その耳をふさぐ耳しいのコブラのようだ。58:5 これは、蛇使いの声も、巧みに呪文を唱える者の声も、聞こうとしない。

悪者の特徴が書かれています。それは、生まれた時からさまよっていることです。つまり、神の憐れみと恵みなしには、直りようがないということです。「エレミヤ 17:9 人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」そして、悪者の次の特徴は、神の戒めに対して何も聞く耳を持っていないということです。私たちは、説得すれば福音を信じてくれると思ってしまいますが、神の憐れみによって、その人が恵みによって信仰に至らない限り、決して神から聞こうとしないということを知らないといけません。

## 2B 神の復讐 6-11

58:6 神よ。彼らの歯を、その口の中で折ってください。主よ。若獅子のきばを、打ち砕いてください。58:7 彼らを、流れて行く水のように消え去らせてください。彼が矢を放つときは、それを折れた矢のようにしてください。58:8 彼らを、溶けて、消えていくかたつむりのように、また、日の目を見ない、死産の子のようにしてください。58:9 おまえたちの釜が、いばらの火を感じる前に、神は、生のもも、燃えているもも、ひとしくつむじ風で吹き払われる。

悪者に対する神の速やかな裁きを信じています。彼らが牙をむく前に神がその歯をへし折ってくださり、矢も放つ前に折ってくださり、そして、水のように、またかたつむりのように消えてなくなってほしいと願っています。

58:10 正しい者は、復讐を見て喜び、その足を、悪者の血で洗おう。58:11 こうして人々は言おう。「まことに、正しい者には報いがある。まことに、さばく神が、地におられる。」

そして、神を信じる者たちには報いがあることを教えています。この姿は、私たちは黙示録 19章の初めに見ることができます。不正を行い、聖徒たちの血を流しているバビロンが、一日にして滅びます。それを天では大歓声が響きます。「1-2 節 この後、私は、天に大群衆の大きい声のよ

うなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した大淫婦をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

私たち人間の心には、無念を晴らしたいという思いがあります。だから、昔であれば水戸黄門、今であれば半澤直樹のようなドラマを見て、心がすっきりするのです。けれども、私たちキリスト者は、神を信じる者たちは、これを神の中で行います。反対があっても、迫害があっても、神がその反対を速やかに裁いてくださることを信じるのです。すると、私たちはその人たちが救われることを願うことができます。その人たちが神の裁きを受けなければいけない器であることを悟り、その人たちに憐れみ、福音を伝えようという余裕が生まれるのです。「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。(ローマ 12:19-21)」

#### **4A 国々を罰する神 59**

59 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。ダビデのミクタム。ダビデを殺そうと、サウルが人々を遣わし、彼らがその家の見張りをしたときに

話は少し戻ります。ダビデが、まあサウルから完全に逃げる前のことです。サウルに仕えていましたが、彼が槍を自分に投げるようなこともしました。そして、彼は家に戻りましたが、サウルは使者たちを送り、彼を見張らせ、朝になって殺そうとしていました。けれども、妻ミカルがダビデを窓から降ろしました。そして、代わりに枕のところに毛で編んだものを入れておいたので、彼らはダビデがまだそこに寝ているものだばかり思っていました。

#### **1B 待ち伏せする敵をあざ笑う方 1-9**

59:1 わが神。私を敵から救い出してください。私に立ち向かう者が届かぬほど、私を高く上げてください。59:2 不法を行なう者どもから、私を救い出してください。血を流す者どもから、私を救ってください。59:3 今や、彼らは私のいのちを取ろうと、待ち伏せています。力ある者どもが、私に襲いかかろうとしています。主よ。それは私のそむきの罪のためでもなく、私の罪のためでもありません。59:4 私には、咎がないのに、彼らは走り回り、身を構えているのです。どうか目をさまして、私を助けてください。どうか、見てください。59:5 あなたは万軍の神、主。イスラエルの神。どうか目をさまして、すべての国々を罰してください。悪い裏切り者は、だれをもあわれまなさい。セラ

ダビデは何も悪いことをしていません。むしろ、主が彼と共にいました。けれども、血を流そうとする者たちがいます。聖書は、初めから終わりまでこの型を残しています。神にいけにえを捧げたア



ベルが、カインによって殺されました。そして、イエス様は祭司ザカリヤが祭壇と聖所の間で殺されたことを言及されました。そしてご自身が、ユダヤ人の宗教指導者によって殺されます。聖書の初めから終わりまで、神の人たちをそうではない、肉に属する者たちが血を流す、その歴史を見ています。罪の性質を宿している肉というのは、神のものを殺すところまでの頑なさや邪悪さがあります。だから、十字架があり、肉の行ないは十字架によって殺されなければいけないのです。

ダビデは、自分を取り巻く環境について、世界規模で起こる神の働きを心にいつも留めていました。それは詩篇第二篇です。国々が相集まって、一つになり、そして神とキリストに反抗することです。しかし神は天からあざ笑われて、その国々を粉々に打ち砕くことを考えておられます。ご自分の子を彼らに示し、この方が王となって国々が彼にひれ伏します。このことが頭にあるので、今、サウルからの使者が自分のところに来ているだけなのに、5節で「すべての国々を罰してください」と祈っているのです。そして、ここで「国々」というとき、それは単なる異邦の国々ではなく、神をないがしろにすること、神はいないということ、こうした神を認めない思い、その不敬虔が「国々」という言葉の中には含まれます。

59:6 彼らは、夕べには帰って来て、犬のようにほえ、町をうろつき回る。59:7 見よ。彼らは自分の口で放言し、彼らのくちびるには、剣がある。そして、「だれが聞くものか。」と言っている。59:8 しかし主よ。あなたは、彼らを笑い、すべての国々を、あざけられます。59:9 私の力、あなたを私は、見守ります。神は私のとりです。

分かりますね、彼らは「だれが聞くものか」と言って、神を軽んじています。これが、彼らが、国々と呼ばれる所以です。だれも聞いていない、だから何を行なってもよいということです。神がすべての声を聞いておられるということを認めない姿です。そして、神があざ笑っている姿をダビデは話していますね。主が、終わりの日に行われることを今の状況に当てはめています。

そして、彼らのことを「犬」と言っていますが、これはかなり強い、侮蔑を含んだ言葉です。けれども、それだけの嫌悪感を持つべき悪意のある者たちであります。新約聖書では、偽教師たちに対してパウロが使っています。「どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。(ピリピ 3:2)」ただキリストの十字架のみによって、救われるという福音、キリストのよみがえりの力によってのみ生きることのできるという福音に対して、それに付け足そうとしている者たちに「犬」という言葉を使っています。私は、こうした偽の福音に対してしっかりと対抗できるような、恵みの福音を伝えなければいけないと強く感じています。

## 2B 激しい憤りによる滅ぼし 10-13

59:10 私の恵みの神は、私を迎えに来てくださる。神は、私の敵の敗北を見せてくださる。59:11 彼らを殺してしまわないでください。私の民が、忘れることのないためです。御力によって、彼らを放浪させてください。彼らを打ち倒してください。主よ。私たちの盾よ。59:12 彼らの口の罪は、彼らのくちびるのことばです。彼らは高慢に取りつかれるがよい。彼らの述べる、のろいとへつらい

のために。59:13 激しい憤りをもって滅ぼし尽くしてください。滅ぼし尽くして、彼らをなくしてください。そうして、神が地の果て果てまでもヤコブを治められることを、彼ら知るようにしてください。セラ

再び、私たちは終わりの日の幻を思い出さないといけません。黙示録によると、獣の国が一時期、確立するように神は許されます。しかしそれは、神に逆らう者たちをことごとく苦しめるためにそうされたのです。そして、獣の国に対してご自身の憤りの極みを注がれます。その時に、彼らはその苦しみのあまり、神の名を罵ることさえします。「16:9 こうして、人々は激しい炎熱によって焼かれた。しかも、彼らは、これらの災害を支配する権威を持つ神の御名に対してけがしごとを言い、悔い改めて神をあがめることをしなかった。」このようにして、彼らが一時的に生かされる。けれどもその間、彼らはますます高慢になる。そこで神は激しい憤りで滅ぼしつくされます。

### 3B 恵みの神 14-17

59:14 こうして、彼らはタベには帰って来て、犬のようにほえ、町をうろつき回る。59:15 彼らは、食を求めて、うろつき回り、満ち足りなければ、うなる。59:16 しかし、この私は、あなたの力を歌います。まことに、朝明けには、あなたの恵みを喜び歌います。それは、私の苦しみの日に、あなたは私のとりで、また、私の逃げ場であられたからです。59:17 私の力、あなたに、私はほめ歌を歌います。神は私のとりで、私の恵みの神であります。

今、ダビデは祈りの中で神がことごとく彼らを滅ぼされることを見ていました。信仰の中で見ていました。それで彼は、タベからうろついて、朝までそこにいて自分を襲おうと思っている者たちの中でも、心を安らかにしていることができたのです。自分の安全保障となってくださったからです。

そしてダビデは、神を「恵みの神」と繰り返しています。10 節で言って、ここでも言っています。神が良いことをしておられるという信仰がここにあります。ダビデが神が味方であると言った、そこにある恵みです。私たちは、恵みの福音を信じています。福音に付け足したり、混ぜ物をしたりするのは、まさに犬のような唾棄すべき存在であり、事実、それは巧妙に教会の中に入り込んできます。そこには実が結ばれません、偽物だからです。だから、恵みの神であるという告白は大事なのです。

### 5A 神に拠る働き 60

60 指揮者のために。「さとしは、ゆりの花。」の調べに合わせて。教えのためのダビデのミクタム。ダビデがアラム・ナハライムやアラム・ツォバと戦っていたとき、ヨアブが帰って来て、塩の谷でエドムを一万二千人打ち殺したときに

最後の詩篇は、ダビデがサウルの手から救われ、そしてユダとイスラエルの王となった後でも、なおのこと敵に取り囲まれていたので、そこからの救いを願っている詩篇です。サムエル記第二 8 章にそのことが書かれています。ペリシテ人を征服し、モアブ人も屈服させました。けれども、北部

のアラム人が自分たちに攻めてきました。それで戦いました。ところが、南東に位置するエドム人が不意打ちで攻めてきたのです。そこでダビデはヨアブを遣わし、ついに彼は死海の南にある塩の谷でエドム人を打ち殺します。ここで不意打ちを食らった時に、ダビデが神に対して叫んで祈ったのが、この詩歌です。

#### 1B 動揺にいる民 1-5

60:1 神よ。あなたは私たちを拒み、私たちを破り、怒って、私たちから顔をそむけられました。  
60:2 あなたは地をゆるがせ、それを引き裂かれました。その裂け目を、いやしてください。地がぐらついているのです。  
60:3 あなたは、御民に苦難をなめさせられました。よろめかず酒を、私たちに飲ませられました。  
60:4 あなたは、あなたを恐れる者のために旗を授けられました。それは、弓にかえて、これをひらめかせるためです。セラ  
60:5 あなたの愛する者が助け出されるために、あなたの右の手で救ってください。そして私に答えてください。

ダビデは、エドムが襲ってきたことについて、あなたが私たちを拒まれた、御民に苦難をなめさせられたと語っています。これは身勝手だと感じるかもしれませんが、これは神への信頼がとて強いことの裏返しです。これまで主に拠って戦ってきました。だから、このような状況になったにも自分たちが招いたことではなく、主ご自身の許しの中で起こっているということをダビデは知っていたのです。モーセがエジプトのパロが、いっさい自分の言うことを聞かなかったので動揺しましたが、神が、「いまに見ていなさい。わたしがイスラエル人をエジプトから連れ出す。」と言われました。パロの頑なでさえ神が用意しておられて、それでご自分の栄光を表されるのです。

そしてダビデは、神を語ったのですが、それでも神が旗を授けてくださった、弓にひらめかせてくださると信じています。エドムが攻めてきたのは、まるでイスラエル全土に激震が走るような衝撃だったのですが、それでも今からでも神は力強い御手で救ってくださると信じていました。

#### 2B 土地を配分される神 6-8

60:6 神は聖所から告げられた。「わたしは、喜び勇んで、シェケムを分割し、スコテの谷を配分しよう。  
60:7 ギルアデはわたしのもの。マナセもわたしのもの。エフライムもまた、わたしの頭のかぶと。  
ユダはわたしの杖。  
60:8 モアブはわたしの足を洗うたらい。エドムの上に、わたしのはきものを投げつけよう。ペリシテよ。わたしのゆえに大声で叫べ。」

聖所すなわち、天から語っておられます。これは、主が喜んでダビデとイスラエルに、これらの土地を与えるということです。すでにイスラエルの地になっているシェケムから話しておられます、ここからアブラハムの旅は始まりました。そしてスコテは、ヨルダン川の西岸にある町です。ヤコブが約束の地に入る時にそこに留まりました。そして、ギルアデはヨルダン川の東岸地域です。これはマナセ半部族に与えていました。そしてエフライムですが、彼らは北イスラエルの中で最も大きな部族です。だから、頭のかぶとと主は呼ばれています。そして、ユダから王が出るという約束を神はヤコブを通して与えられました。だから杖です。

そして南東、死海の東に位置するモアブについて、神は足を洗うたらいと言っています。つまり、モアブをイスラエルに仕えさせるという意味です。このことはすでに神は、ダビデを通して行ってくださいました。そして、神はこれからすること、エドムは履物を投げつけると言われます。つまり、ことごとく打ち倒すということです。そしてペリシテ人ですが、彼らもすでに屈服しています。大声で叫ぶとは、泣き叫んでいるのです。こうして神はダビデに対して好意を寄せており、彼の祈りに快く答えてくださっています。

### 3B 虚しい人の助け 9-12

60:9 だれが私を防備の町に連れて行くでしょう。だれが私をエドムまで導くでしょう。60:10 神よ。あなたご自身が私たちを拒まれたのではありませんか。神よ。あなたは、もはや私たちの軍勢とともに、出陣なさらないのですか。60:11 どうか、敵から私たちを助けてください。まことに、人の救いはむなししいものです。60:12 神によって、私たちは力ある働きをします。神こそ、私たちの敵を踏みつけられる方です。

ダビデは、主からの答えと確証が与えられても、「あなたが一緒に行ってくださいなければ、できません。」と訴えています。かつてモーセが神に対して、「あなたがいっしょに行ってくださいなければ、イスラエルの民が約束の地に入ることはできません。」と強く訴えたのと似ています。主が共におられるのでなければ、すべての働きは無意味です。神によって初めて力ある働きをすることができるのです。ダビデは実際は、ヨアブをそこに送りました。けれども、それが主にあってなされるのでなければ空しいのです。

いかがでしょうか、私たちが主の働きをしていてそこで何か問題が生じる時に、「それならば、人の補充を入れればよい。」として満足してしまうでしょうか？教会はキリストが満ちておられるところです、ですからキリストにあって初めてすべてのことが成り立つのです。人によって補うのではなく、キリストが満ちてくださらなければ意味がないのです。

ダビデは、イスラエルの王となってから周囲の国々対してことごとく勝っていきましたが、サムエル記だけを読むと何の問題もなく進んでいるように見えますが、この詩篇を読むといろいろな困難が伴っていたことを見ることができます。主が共におられる、主が勝利されるということは、必ずしも困難がないということではないのです。意表を付くような攻撃が来ます。想定外のことが起こります。自分の思っていたことと違うように見えることが起こります。しかし主に、すべてをしていただくように、へりくだって祈っていかないといいけません。